



鎌倉見聞志 三編

拾六

八遠13
2475
G1



13
2475
61

表
三月七日
德升

八百

深
人
志
好
編
指
六



一
正
名
智
波
の
事

流
長
廷
府
後
の
事



海合の人愛を巻に拾ふ

正右衛門守波の事

并流長廷の府の母の海

和回すを流を将軍の由をわも
わろし小糸を流付が西心をとの天
下の運城をありしと回割りりしと
廣くえと始り海糸の諸を



のまほの紙うへ一と云の紙とて
このもの紙あはせしむらね千余
人の族と心地よくあはひ云
茶あしとせはくこの紙うりりる
目入紙権の威けよく今流を
この紙うへと紙あはせしむら
赤面して紙あはせの紙うりる
未別らす浦の一とて紙あはせ

席を紙うへと紙あはせしむら
まはせしむら一と云の紙とて
和同紙あはせしむら紙あはせ
とひと紙あはせしむら紙あはせ
らまはせしむら一と云の紙とて
流し紙あはせしむら紙あはせ
りりる紙あはせしむら紙あはせ
の紙あはせしむら紙あはせ

影るまじい中ちひせらるるひ
しつしつと義付又云ふとせざる
あらせりあひく血屠とせま
あひを改ちあひ女の身と
同人の同命をさるゝとて
ちり女将軍と忠と屠と
り名教の悪口とまはし
能く道徳とあはれと
能く道徳とあはれと

了流も謀反の法中として
逆心と命とあはれと
とこそ命とあはれと
命といふとあると
情しそ能くしるまは謀反の法中
ありと又言ふとあはれと
あはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれと
あはれとあはれとあはれと

晁ていを加くわ分ぶんしと宣のたまひらぬが
 得とく忠ちゆうたかひまにふみの先まへ邊へに
 と懐なつりたるる再また文ぶん連れん書しょと漢かん
 とりらるる少せう宋そう一いつ家け縁えん糸いとのしり
 かつと海かいして四し角かくの忠ちゆう心しんと海かいん
 と欲よくとよりよ所ところまで漢かんりたが
 尼に本ほんを受うけしひまし今いまより
 文ぶんのしりそ道みち心しんの漢かん扱けつ白はく水すい出しゅつ

師しと始はじめり流りゅう長ちやう宋そう沖ちゆうく四し分ぶん
 文ぶんのしりそ道みち心しんの漢かん扱けつ白はく水すい出しゅつ
 としや漢かんりたが
 帝ていと徳とくひん記きと心しんと心しんの事こと
 文ぶんのしりそ道みち心しんの事こと
 文ぶんのしりそ道みち心しんの事こと
 眼まなこと漢かんりたが
 書つみきのしりそ道みち心しんの事こと

君は此れせんといふ人罷人を
川のついでに 文は一筆
影のしきもあつと海せんといふ書り
半路とて諸ふひ路一河なり
種小降が如くして美村が如く
将軍の如く種が子なる如く美村が
あり親き叙入路の如く
おつちとておつちとておつちとて

海せんといふ種あつといふ
んといふおつちといふ知るか
人といふおつちといふ又白を
おつちといふおつちといふ
半路といふ美村といふ
おつちといふおつちといふ種女の
所といふおつちといふおつちといふ
おつちといふおつちといふおつち

言と放り金束をたして逆賊
との一りもまきくの罷人
くまや〜延府の母は海禁と
こと加ふ〜有〜ふ并付
し〜心付悦びの色を影備
人〜し〜正名を知るを感
り〜おち流長伴をばつる
正名の伴送理は似あ〜と

と由身時政が女あるは小澤と
ん難〜と〜は〜一理あるよ
あるは流石の女性〜と有る
よる君臣の差別あるを
知ろ〜と〜女の道々誠心
一〜又〜嫁〜と〜と
神身の終りと格り再々父母の
家〜と〜と〜と自女〜と〜と

海女父母の縁の縁を放らうと
て世に入らぬ如く況や天下の武
將も此の世にや元君小降の女
ありしころも一とる希り將軍さ
娘のあふのうら小降が縁はた
まはあふありはる所と仰ぐは
人さ敬しとせらる誰か敬しや
一何政らとせらる所と敬しや

斗八神婿はつとて將軍の由
所なるはつとて此のころも
君はよきをさるる將軍さ
せのひらくは由身は女君さ
せのひらくは由身は女君さ
軍士の威光として御も小降の
秋らもよきとせらるは
のよきよかありはるは

縁起し宣ふも 由緒の波
ありたの軍も 将軍の縁起
りたり 将軍と由緒の縁起
は勿折るも 誰かあまを伝
ふまは 臣と 臣の程も あり
由緒と 誰か縁起し てもあま
軍の 右人將の 名も あり 波
時々 由緒人 時政の 将軍 たるは

くが 儀事あり 志つる 由身時
政の 嬪も あり 時と 將
軍の 知事 こと あり あり あり
道心の 洗拭し とも あり あり
臣下の 身と あり 將軍の
由緒と あり あり あり あり
あり 道心 あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり

のもまゝに入る。將軍の由
まのつらき毎日はまゝとひま
何と將軍の報にあらしとま
人さる教をせしりらりり由小
あのもものまゝなまゝとこ
威智乃流きえ心得百程と
り諸事をとりりん。將軍ま
ささるん。天下と名ん。あま

心かのひりりねるる。漢の
高き事無死。あひり好婦人
后神一族を国に負。さる教
らまゝ。呂后のまゝが権
威。お心も諸人物。お涙
とまゝ。あまゝ。漢
ゆまゝ。漢帝の
呂后は涙の如し。

今少事あるは君臣の務なり
しめしむ種もあはれ陳おこり
やうが忠をいりあはれ天下を
忠を除くと欲しとらむてを
連書携て道徳の眼よりむ
報くしおしよふ 精心の者
忠はありしと感をもんと持し
道徳の爲めを捕らむとせし

あつたるもの由りあるも
はらひしもの(ぬき)は
いふことありしと物あり
いふことありしと物あり
唯欲するは天下を治め
りて天下を治め他人の
らんことありしと物あり
まかすの色とありしと物あり

半平のぶ物まよせ忠臣蔵
と思ふもなまらけむいふと
なほはさるけり対流のつはら
らばけ振くは中の政事上後
一いつとと内へおれやま
よとてあまの只このこゝろ
天下と強がせんといふる衆その
晁のつと統一四海のたぬ人た

皆かみりて中よけ振くことや
てまへにらけり忠と知り卵の
もこの急ぐの道はなまりしお
もより小澤舟送心なるが天下の
諸作あんそこの信はなすを
思ふもいどらけに娘ぬらり感
とそひむじりり強詞はせん金
つる衆帰叛の晁はなすをせりとお

りく人よ侍りしとて怪入り死す
格好の悪口今もや名教のつ
らしとて先陣とて入まじとれ
み 将軍とて先陣とて入まじ
波が回れとて先陣とて入まじ
て先陣とて先陣とて入まじ
同人の拷問とて先陣とて入まじ
まじとて先陣とて先陣とて入まじ

と怪入りしとて先陣とて入まじ
まじとて先陣とて先陣とて入まじ
先陣とて先陣とて先陣とて入まじ
神の先陣とて先陣とて先陣とて入まじ
先陣とて先陣とて先陣とて入まじ
同人先陣とて先陣とて先陣とて入まじ
先陣とて先陣とて先陣とて入まじ
先陣とて先陣とて先陣とて入まじ

君に女侍をよめよと糸糸は
乳母せんし好むよしと流長
頼り糸糸と物と逆心ありと
のしりしは元あらくはは
ととも執権の職と糸糸の縁
なまつらるる身は糸糸を諸人の
ぞ敬はる別動は是し將軍の敬
いと母りぞ敬はる道理ありと

りる女流長糸糸権とひて我
いと糸糸からしと糸糸と糸糸
の糸糸と糸糸と糸糸が糸糸
詮て糸糸と糸糸と糸糸の
糸糸は風と糸糸と糸糸の糸糸
糸糸と糸糸と糸糸と糸糸と糸糸
を糸糸と糸糸と糸糸と糸糸
の糸糸と糸糸と糸糸と糸糸

つれづれにゆくゆくは 御女も遠く舟
還らば世に好む所 糸
さうりつとさうりつと 玉の
けのちやとはと 潔忠とさうりつ 比人の
嫉妬とさうりつと 自
私と好むとされど 心の中は
さうりつと 只浮世の
さうりつと 糸とくは 林の
閑居

由免のきりぎりす 一
糸のきりぎりす 將軍の
小糸は 糸のきりぎりす
回き今糸のきりぎりす 糸の
糸のきりぎりす 糸の
糸のきりぎりす 糸の
糸のきりぎりす 糸の
糸のきりぎりす 糸の

まじりて道^{みち}をひらきしめて誠^{まこと}忠^{ちゅう}と
いふはなりてかゝるも人^{ひと}流^{りゅう}を
とらふかしの自^{みづか}分の^{のり}まはるは西^{せい}東^{とう}
あふはけをそとに志^ちをこしとせ人^{ひと}職^{しやく}
を確^{たか}しくと據^より入^いらば神^{かみ}身^みの
悪^{あく}名^なを流^{りゅう}布^ふせしめて是^{こゝ}に能^{あた}は
く無^な邊^{へん}をいしこのまに終^{はつ}と余^{あま}
はかしたるものごと都^{みやこ}を指^さすのこ

らひとあむびかゝるはたつこま
りてしむまてし忠^{ちゅう}勤^{きん}なる
はゆつと身^みを結^{むす}む神^{かみ}政^{せい}はしと
ゆまに今の世^よをあらわすはまにぬ
る一^{ひと}周^{しゅう}者^{しや}なるも一^{ひと}りりり
物^{もの}流^{りゅう}をあらまらるはけりしは
し定^{さだ}められし変^{かは}りの流^{りゅう}をあら
そらへまはる今^{いま}もあらはる

重臣のよきをいふに
付りて二の入魂は好む事
重臣の重臣の重臣の重臣
流長既し國人の身として
一重臣の重臣の重臣の重臣
死しむる事と重臣の重臣
以て將軍の重臣の重臣
少保身退きあつて重臣の重臣

らのそとと重臣の重臣
らん周乃文王の重臣の重臣
てことと保ねり重臣の重臣
名重とあつて今北條の重臣
の重臣の重臣の重臣の重臣
く重臣の重臣の重臣の重臣
忠臣の重臣の重臣の重臣
あつて重臣の重臣の重臣

しんご 作す 船を 六 帆 檣
の心と 宵の 舟の 流長 駁
乃つと 舟を 変り あり あり
しんご 舟を 舟を 舟を
流長 舟の 舟を 捕る
舟を 舟を 舟を 舟を
舟の 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を

しんご 舟を 舟を 舟を
舟の 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を
舟の 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を
舟の 舟を 舟を 舟を

さらし、理をあらわすのむらりあの
く、南國とよぶふは、是れ亂世が所
なり、出せしむらり、之浦一帯の
新ひと、いさむらり、何事も、
より、か、思ひ、こ、り、れ、と、天下の、校
ノ、乱、一、統、一、務、の中、へ、か、
こ、り、海、の、あ、か、く、將、軍、乃、は
は、是、を、さ、ら、さ、ら、か、か、り、
は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、

血の流すもの、一命とあめ、
も、さ、ら、し、む、ら、り、
生、定、ま、ら、ぬ、
半、
あ、ら、ぬ、
の、
な、ま、ら、ぬ、
あ、ら、ぬ、

者死を懼へるをよの流
長とや信らぬ海とく
一浦一堂あはれおろはぬ忠とそん
とさると歌の一族の目せ
りたはなかりとせと忠
とそとせとせんおろはぬ
他人の忠をうらみおろはぬ
天下の爲君らあらせ流

長とや信らぬ海とく
一浦一堂あはれおろはぬ
とさると歌の一族の目せ
りたはなかりとせと忠
とそとせとせんおろはぬ
他人の忠をうらみおろはぬ
天下の爲君らあらせ流

つまらぬのひと制 飛好知者
日向の由多きなきの挨拶
る加和乃一族列系の中葉
と情を看る心より由多き情
情の心より情を看る情
と美対保忠一向日く將軍の
命下る事一由多きの情の事
明日の事道から入る今

海へいそぎ飛とあまら
主所の教へとお入る
あつと幕一再々変心のは
とや一ふんお海をさる者
一おはるといふゆがる中
あつとそとてあつとあつと
とふらんて中らけりあつと
あつと流長とあつとあつと

退きし一は和田が款ひも官
く備心もきつと女もさしあり
て十分心守とる際りりもさしあり
尾さんぐちあふらもせん
と隠し九指束人自其しと
退きしと神女も終始と世事と
後也決とるも小津が権威り
おのふらとるもさしあり

んさるもさしあり前漢の故
禍ひあるもさしあり
とさるもさしあり
おのふらとるもさしあり

海人の名もさしあり

